

研究報告

日本人学生と留学生との交流：対等な関係の模索（その1）

花見 槇子

Search for an Equal Relationship: Interactive Processes among International and Japanese Students (Part 1)

HANAMI Makiko

〈Abstract〉

This is a part of the long-term ethnographic study on international and Japanese students at Mie University through interviews and participant observation. The analysis is primarily based on the interview data collected in two years from three Japanese students who have been playing leading roles in student international activities.

The researcher is in an advisory position to promote interactive opportunities among international and Japanese students. Students' real-time cross-cultural experience has rarely been taken up in formal university education. Nonetheless, it is no doubt that such is one of the precious educational moments worth while recording, analyzing and integrating into classroom education. The researcher aims at in the long-run establishing a method to effectively combine "action," "research" and "education" in the field of cross-cultural education.

This article focuses on three aspects of interactive processes: 1) the student group activities that catered to the initial concern for encounters, 2) assistance offered by the Japanese students for the arriving international students and conditions for the development of friendships, and 3) search for equal relationships between international and Japanese students.

The final aspect, the equal relationships, was revealed difficult to establish. The continuing search and analysis is presented in a separate study report.

キーワード：留学生、日本人学生、支援、親密化、対等な関係

序論

これは、三重大学における日本人学生と留学生との交流を、日本人学生への面接と彼らの活動に関する参与観察を通して行っているエスノグラフィック・スタディの一部である。(花見 1999) 本論では、2年にわたる面接と観察によって得られたデータのうち、特に3人の学生の1年次または2年次の終わりから3年次または4年次の現在にかけての活動

を中心に分析する。3人はいずれも、留学生との交流を目的とする学生活動においてリーダーシップを発揮してきた学生たちである。

筆者は、留学生センターの交流指導部門の教官として、日本人学生と留学生との交流を推進するための企画を行い、学生たちの自主的な活動の相談に乗り、サポートする立場にある。したがって、この研究は、そうした実践と並行して進められるアクション・リサーチであり、研究の成果は学生たちの指導に直接還元されるものである。横田(1999)は、これまでの大学教育には留学生と日本人学生間の異文化体験を教育の素材として取り入れた授業はほとんどないことを指摘しつつ、実践と教育の統合を展望している。筆者も、現時点での学生たちの交流活動自体が留学生と日本人学生の双方にとって紛れもない教育的機会であることの認識に立って、近い将来に大学教育に正式に組み込む可能性をも視野に含めて、実践と研究と教育との連関を具体的・実証的に解き明かすことを目指している。

本論で取り上げるのは、2年間のリサーチを通して明らかになった交流の諸相のうち、以下の3点である。第一は、留学生との交流を目的とする学生サークルの初期の活動について、第二は、留学生の生活支援活動をきっかけとして、留学生と日本人学生がどの程度親密な関係を築くに至るのか、第三は、留学生と日本人学生が対等な立場で交流活動を行うという志向の芽生えとその展開についてである。

1. 留学生との交流サークルの存在とその活動

三重大学には、筆者が赴任する1997年12月以前より、日本人学生による留学生との交流サークルが存在した。学生たちは、新入留学生歓迎会、バーベキュー・パーティ、茶会、クリスマス・パーティ、送別会等のイベントを月1回程度企画して留学生を招待することによって彼らの目的である「留学生との交流」を行ってきた。

このサークルに1年次より参加し、3年次を目前に次期サークル代表を引き受けた学生Aは、当時の面接で、留学生との交流を自身がどのように考えているかについて以下のように語っている。

留学生との交流というのは(最初は)お互い分かり合えない部分があって、こんなあんまり面白くないやとか思いがちなんで、僕も(相手が)日本人じゃない違和感というのがあって、そんなに楽しいもんでもないな、と思ったんですよ。でも、だんだん接する機会が多くなって、いろんなことを話してるうちにそのほんとの楽しさというか、他の国の人と話す楽しさというのが分かってくると思うんです。

Aは、留学生との出会いの初期段階における違和感等を克服したその先に、真の交流の成果を期待していた。では、一回会っただけですぐに親しくなれるものではなく、むしろ初

めは違和感や緊張感を覚えるほどの出会いであるとすれば、そうした困難を乗り越えて親しさを増すには、更なる機会、それも継続して関係をもち相互理解を深める工夫が必要となる。サークル活動はそうした機会を作り出しているのだろうか？

個人的には大学の構内で会ったりすることがありますが、イベントとしては一ヶ月に一回が限界なんで、継続して会うにはどうしたらいいのかまだ分からないんですけど…

勉学の他にサークル活動を掛け持ちしたりアルバイトに忙しい学生たちにとって、一回のイベントを企画し実行することもそう簡単ではない。メンバーの合意の下にスケジュールと役割分担を決め、掲示や招待状を出してひとつのイベントを滞りなく行うのは、1ヶ月に1度が限界であるとAは言う。いきおい、イベントとは日本人と留学生との出会いのきっかけであって、そこで互いに関心をもった同士が、個人的に連絡を取り合うなどして親交を積み重ね、友達になるということが期待され、理想とされる。では実際に、サークルのイベントをきっかけとして親しくなった留学生がどの程度いるのだろうか？ A自身は、イベントでの出会いから誰かと特に親しい友達関係に発展したということはまだないと言う。

そうですね。イベントに何回か顔を出してくれた留学生というのは、やっぱり学内で会っても話すし、……でも、そんなに、どこかへ一緒に旅行に行ったりとか、そこまでは僕はまだいったことはないです。

これはAに限ったことではなく、大抵は、イベントでの出会いを通して顔見知りになってキャンパスで偶然出会えば言葉を交わすことはあるものの、それ以上親しくなるということもあまりない。そこで、単にイベントだけを行っていてもより深い交流へ発展する期待はもてないとの焦燥感が生まれる。

やっぱり、今のままだと、留学生と表面的なつきあいに終わるんで、もう少し頻繁に話す機会っていうか、そういうのを設けたいと思うんです。具体的には何も計画は立っていないんですが、もう少し、何か、お互い言葉を教えあう機会を設けるとか、もうちょっと、一歩進んだ交流をしていきたいと思います。一度会って、話し合って、それっきりって場合もあるんで、もう少しお互いいろんなことが知れたらいいと思うんですけど、でもなかなかそういう機会を設けるっていうのは、やってみないと分からないんですけど、何か難しいことかな、と思うんですけど…

サークル活動として、単なる出会いから一歩進んだ交流を行うにはどうしたらよいかを、新しいリーダーとなったAは模索していた。このような時期に、三重大学には留学生センターが設置され、日本語研修生と呼ばれる留学生たち、すなわち文部省の奨学金を受けてまず半年間の日本語集中教育を受け、その後、それぞれの専門分野での勉学や研究に従事する予定の留学生たちが入学してくることとなった。日本語研修生たちのほとんどは事前

に日本語を学ぶ機会もなく4月または10月のコース開講に間に合うぎりぎりの時期に渡日してくる。そこで留学生センターは、これらの留学生の渡日時期の生活支援を、交流サークルの学生たちの協力を得て実施することとなった。

2. 留学生の生活支援へ

交流サークルの学生たちによる支援活動の内容は、1) 空港から国際教育協会の職員等によって大学のある都市までの特急電車に乗せられた留学生を駅頭に出迎え、留学生会館に入居させる、2) 彼らの生活の舞台となる学内外を案内する、3) 当面の生活に必要な物資の購入を手伝う、4) 市役所での外国人登録、国民健康保険加入、銀行口座開設、留学生課での入学手続き等、日本語を要する諸手続を手助けする、といったことを基本とし、センターが組んだスケジュールに従って動いてもらう。留学生が10人渡日するとすれば、到着日は3、4日に分かれることも普通であり、母国から30時間に渡る旅を続けて早朝日本に着いたまま大学に直行し綿のごとく疲れ切った者から、前夜ホテルに宿泊することが出来、比較的元気な者まで、到着時の留学生の状態は様々である。彼らの状態やニーズを考慮しつつ、コース開講までの1週間前後の間に生活の基本を整えるために種々の支援をする。センターが立てた基本的な支援プログラムに留まらず、個々人のニーズや相談事に応じる必要も出てくる。ボランティア活動に応じた学生たちは、着いたその日から彼らの誰彼と食事を共にする等、センターのプログラムの範囲を超えた自主的な行動を取り、留学生たちにとっては日本到着後最初の日本人の「友達」となった。彼らの関係は、センターが企画した支援活動期間が終了してからも継続していった。

この留学生生活支援活動は、イベント中心の交流サークル活動に限界を感じていたAにとってはかなりの影響をもったと言える。

…今までは(留学生と)そんなに頻繁なつきあいはなくて、今回、(新渡日の留学生の)ボランティアをして初めてあんなに仲がよくなったというか、あれが一番親密な関係になりました。

日本人学生にとっても新学年が始まって早々の忙しい時期の活動であり、時間のやりくり等かなり大変だったのではないかとこの質問に対しては、

でも、買い物とか一緒に行っても、楽しかったです、やっぱり。日本人とは違った視点で買い物をするというか、言葉も完全に通じる訳じゃないんで、お互い気を使い合っ、というか、何がほしいのかとか、心を察しながら、一緒に買い物できたというのはすごい楽しかったです。

と、極めて肯定的な反応であった。さらに、生活支援をきっかけとして度々彼らと食事等を共にした結果、ただ楽しいというだけでなく、留学生に接する自分の態度にひとつの転

機が訪れたことをAは指摘している。

2年生の頃は、留学生達と会話が途切れちゃったらどうしようとか、そういう心配で必要以上の恐怖心みたいなものがあったと思うんですけど、最近は、自分の語学力が劣るからといって交流を避けようとする気持ちはないですね。

自分の語学力に自信のなかったAは、思うように自己表現ができないし、相手の言うこともわからないのではないかという不安が先に立ち、留学生と交流したいという建前にも関わらず、相手を避けていたことを認める。

意識的というか、無意識に避けるというか、たとえば、すれちがったりしても、そこで立ち止まって話してもなあと思って、ただ挨拶をして通り過ぎたり、無意識にも避けていたと思うんです。

こうした状態は、Aの場合、1、2年生の頃から3年の4月まで続いたと言う。

3年生の4月から受け入れの手伝いを始めてから、留学生と比べて、自分の英語力がそんなになくてもなんとかやってけるんだなあっていうことが、接するうちにだんだんわかってきたんで、最近では、生協とか食堂とかで会っても、じゃあ一緒に食べようかということになったりすることが多くなりました。

その後も、新渡日留学生の生活支援をすることをAはやりがいのある活動と積極的に評価する。

楽しみです、いつも。去年の4月から、もう1年がたつのかと思うとすごい早い気もするんですけど、やっぱり、初めてやった時、秋にやった時と、2回とも面白くて、外国人登録なんて、普段できないことができるし、それでまた、新しく来た留学生の成長の過程とかもわかるじゃないですか。はじめ来たときはあんだったのに、とか、そういうのもすごい面白いし、やりがいのあることだと思います。

次いで、翌年、交流サークルの代表をAから引き継ぐことになるBは、留学生との交流の企画をしたり、留学生とつきあったりすることの意義を以下のように述べている。Bは、考え方や習慣の異なる様々な人間と広くつきあうことに極めて積極的なタイプの学生である。

ひとつは、日本人も含めて、いろんな人と話すのが好きだから、あと、違う国から来たということで、考え方も違うだろうし、彼らにとって普通のことと私たちにとって普通でなかったりとか、そういう、話してる途中で何それってなることが面白いんですよ。

Bはまた、留学生の生活の面倒をみたりイベントのお膳立てをしたりの大変さをほとんど感じないと言い、なかなかコミュニケーションが成立しないような場合でも、かえってそこに面白さを見出している。

ああ、そういうこともありますね。でも楽しいです、特に買い物とかはすごく楽しいです。いろいろ説明しようとしても通じないんですよ。だから品物をもってきて、これ、と言って、

ああ、これね、って感じで、やっとなんか、面白いです。

このようなBは、複数の語学に加えて教職課程を含むいくつかの資格取得をも目指して目いっぱい授業を取り、アルバイトもこなしながら、なお次回のボランティア活動にも意欲を見せる。

ああいう、受入の時のボランティアの仕事、また10月もあるんですよ。またやれたら楽しいな。他にもやりたいって人が結構いるし。私がこんなことやった、とか話すと、あ、私もやりたいって言う人、いますよ。

3人目のCは、留学生との交流について、大学入学当初から関心が高く積極的だったわけではなかった。

……Bに、(サークルが)あるというのを聞いて、そこに行けば会えるんだな、と。あと、授業でも異文化接触、国際理解ナントカという授業があって、それで日本人の見方と外国人の見方の比較をしたりとかというのをやっていた(けれど)、やっぱり授業ですと限りがあって、もっと知りたいためには直接会って話したほうがいいなと思ってたんですけど、……行動までには、あまり移らなかった…

Cの場合も、留学生と交際することになったのは渡日時の生活支援活動がきっかけであった。そうした活動を通して留学生と接触した感想をCはまず、「私の中で大ヒット」と表現した。その意味は、今まで気づけなかった自分に気づき、自分を変えていくきっかけとなったということらしい。

いろいろ、気づかされたことが多いというか。ああ、自分ってやはり日本人なんだとか。むこうの国ではこういうふうには考えたり行動したりするんだとか。……ものごとをはっきり言わない、断るときとかそうなんですけど。日本人は、ちょっと予定が、という感じなんですけど、…予定があるんだったら予定があるで、別に悪いことじゃないからはっきり言ってくれとか、そういうのをよく言われました。あと、もっとオープンにというのをよく言われました。何でも話すというか、何かをやったりするときにあまり躊躇しないでどんどんやっていくとか…

Cにとっては、自分の考え方や行動に関して他人から指摘されるのは初めてで、それが新鮮な印象と肯定的な驚きを与えたようである。

留学生との交流を志す日本人学生たちは、新渡日留学生の生活支援活動に対し、単に援助を必要とする外国人留学生へのサービス提供以上の意義を見出したとすることができる。

3. どれだけ親しくなれるか

98年4月末の面接で、Bはそれまでに、私的なことまで躊躇なく話し合えるほど仲良くなった留学生はいないと答えた。しかし続けて、4月の渡日時の生活支援を通して知り合った留学生たちとは、たぶんこれからいろいろ話せるようになると思う、という期待感

を明らかにした。

Gとはずっと、いろいろ話せるような気がします。最近はずっとこんだ話をするようになってきてるし…仲良くなってるんです。

ただし聞かれると、日本人の友人に比べて、留学生とのつき合いには違いがあることも指摘している。

電話をかける頻度とか。話したいなと思ってもすぐかけるかどうか、日本人の人にはすぐ電話をかけるし、学校でよく会ったりもするんですけど、（留学生には）あんまり会わないし、授業が同じだと授業の前に話したり、授業が終わってから、じゃどっか行こうかって話になるんですけど…別に、話したくないってことじゃなくて、話す機会がないんですね。

留学生と電話で話す頻度がより少ないのは、1）留学生、わけても新渡日の留学生は電話を持っていない者が多く、物理的に電話連絡がしにくい、2）電話を持っていたとしても心理的に電話をかけることをためらわせる要因がある、の二つが含まれており、後者の原因としては、一般に双方の語学力の不足から、対面での会話よりも電話による会話の方がより心理的負担になる傾向を考えることができる。とすれば、留学生との親交を深める上では時間と空間を共有する対面機会がより重要ということになる。にもかかわらず、同じ授業を取ることもない留学生とは会う機会も限られてくる。日本人学生にとって、授業に限らずクラブやサークル等の一連のキャンパスにおける活動を共有することによって、対話の機会は意図的に設けなくともほぼ定期的に確保され、それが携帯電話の活用によって強化され、親密化を促進する。留学生とのつき合いでは、日本人学生にとってのこうした「自然の流れ」には乗りにくい。

こうした限界があるにもかかわらず、Bはその後2ヶ月近くたった6月半ばの時点での面接では、特定の留学生との親交が深まる様子を報告している。

（留学生MやNとは）いつも一緒にいてよく話すんです。一時期、私がスランプに陥っていたときがあって、その話をしたら、ああそうかも知れないというようなアドバイスをもらったり…自分の夢がかなうかどうかわからなくて、高校の先生とかに相談したら、すごいむずかしいよねって言われて。（海外で）働きたい、（それも自分の好きなことに）携わって働きたいなと思っていて、…（でも）日本人は使ってくれないんじゃないかって言われて……そんな話をしていたら、（留学生Mが）自分は日本に来れるなんて全く思っていなかった、そんな夢のまた夢で、親にお前は何を考えてるんだって言われて、けど、努力すれば夢がかなったって。だから努力は続けるべきだって言われたんですよ。それで、そうだ、と思って、がんばってみようって気になりました。

さらにその5ヶ月後の11月末の面接では、共通の授業を定期的な顔合わせの場とはしにくい留学生とのつき合いを、頻繁に食事を共にすることによって克服して親密化の度合いを増していく様子を述べている。

(留学生M、N、Gとは)よく会って、話をし、ご飯も一緒に食べてます。3日に1回くらいは、絶対、だれかとご飯を食べてるような気がする。お昼ご飯か、夜、一緒に食べるか、どっちかで。昨日も(留学生Mと)いたし、お昼は、(留学生GやM等)4人で話をしたし。

食事を共にする中で、話題は広がり、もはや留学生渡日当時の、生活支援をする日本人学生と被支援者である留学生という関係を越えた友人関係が見られる。

「お祭り」についてのレポートを提出したあと、各国のお祭りってどういうのがあるんだろうと気になり始めて、(留学生Nに)その話をしたら、あ、僕が書いた文章があるから教えてあげる、とか…

それぞれが、今どういうことに興味があるか、どのような勉強をしているか、将来何になりたいかといった個人的な関心についてオープンに話し合うことが自然にできるようになってきたとBは言う。さらにこの当時、Bが留学生たちとの親密化が増したと感じる出来事として、Bと共に留学生とのつき合いのあったYの親友の急逝があった。

きのう、(Yの)親友が亡くなったんですよ。……で、きょうがお葬式で。そのことを、きのう、(留学生GやMが)すごい親身になって聞いてくれて……いろいろ、わからないことが多かった。午前中は何もする気がなかったんですけど、午後になってからは、お葬式に行くとかいう話をし始めて、(留学生Mが)じゃ僕の先生のところに行って、葬式のときはどうするのかを聞こう、とかいう話になって、……そのとき私は授業があったので、(Yの他2、3人の日本人学生と留学生とが)一緒に行って、いろいろ相談にのってもらったとか言っていました。(留学生Gも)結構アドバイスをしてくれたみたいで、Yは、みんなが自分のことを考えてくれて、すごいうれしかった、みたいなことを言っていた。

この場合、日本人学生の方が精神的に動揺する状況にあり、それに対し留学生たちが「親身になる」、すなわち日本人学生たちに理解と援助を与えることになった。渡日時の、日本人学生=生活支援者、留学生=被支援者という構図が逆転している。Bはその結果、日本人学生と留学生との立場の違いがなくなった、と感じた。

最近、留学生とか何とかっていうよりも、いい友達だなあとと思います。留学生じゃなくなって、普通の友達、……線がなくなってきたみたいな感じがします。ずっと一緒にいるからかもしれないんですけど、……すごい、いいなあとと思います。励ましてくれたりとか。彼らの悩みとかは、最近、あまり聞かないんですけど、でも普通の話ができるんですよ。前は、日本はどう、みたいな話が主流だったんですけど、今は日常生活の話、今日は何々があって、こんなようなことがあったとか、こういうことがいいことだったとか、そういう話までするし……。

留学生との親密化に関して、誰もがBのような達成感をもつに至るわけではない。親密化のプロセスとは、まさしく個人と個人との関係がその基本であり、したがって、それぞれの個性が大きく物を言う。Bは、人とのつき合いについて、特定の人間関係や狭い範囲の

つき合いに縛られることを嫌い、自分はどちらかというところ「浅く広くつきあうタイプのような気がする」と述べている。これは、中学時代に数人の女の子同士が固まって排他的なグループを構成し、互いの悪口を言い合い、それが一部いじめにも発展した経験に基づいている。その後、高校時代により自由な友人関係を持ち、その結果、特定のグループに拘束されることなく、「どこに行っても受け入れられて、誰ともいろいろな話ができる」ような環境を理想とするようになった。高校時代から続く友人関係、大学の授業を通して得た友人たち、所属するサークルでの友人、留学生たち等々、様々な人間関係を築いていく中で、「いろんな所に自分がある場所を作っていきたい」と言う。したがって、自分には「親友はいっぱいいるような気がする」と言い、誰に何を話したのか忘れてしまうこともしばしばあると言う。このような人間関係を全般に浅いと見る向きもあるだろうが、「かなりつつこんだ深い話」に発展することも度々あるし、自分自身のことについて他人に話すことも全く苦にならない、と述べている。

比較して、交流サークルのリーダーとしての責任感が強いAは、生活支援活動を通して、留学生を特別視せず普通の友達として接することが出来るようになったことを成果としてあげているが、6月の段階では、個人的に特に親しくなった留学生はいないと言う。

僕の場合は、特定の人とよく話すとかいうことはないですね。……4人とも会えば少し話すという程度で…最近はある程度会う機会もなくなってきて、4月当初の授業のないときみたいに、毎日顔を合わせて一緒に買い物に行ったりとかするわけじゃないんで、2、3日に一回も会わない程度ですね、今は。……特に個人的な深いつき合いはないですね、僕の場合。僕んちは留学生会館に近いで、今日も朝、歩いてると（留学生M、Nと）一緒になって話しながら来たけど、それくらいです、今のところは。

さらに、半年以上経過した段階でも、留学生たちを「普通の友人たち」と言い、彼らに必要なことがあれば時間の許す限り手伝い、交流サークルの企画に招き、顔を合わせれば言葉を交わすという関係が続いている。

ある個人と個人の親密化の進展に関しては、二人の頻繁な時間の共有を土台として、互いの自己開示の度合いが大切な要素であると考えられる。自己開示とは、「他の情報源からは得ることのできない個人情報、自発的、意図的発露」と定義される。（西田1994:66）AとBを比較すると、Bが、語学力の限界をものともせず、自己の悩みや夢をさらけ出すことによって留学生の関心と共感を集め、親密化の度合いを深めたと自覚したのに対し、Aの場合はそのようなきっかけがなかなかつかめていない様子がかがえる。また、このような対人関係の違いは、特に対留学生関係に現れるというよりも、日本人同士の友人関係においても共通すると言えよう。横田（1991）は、留学生と日本人学生の友

人形成アプローチにおける違いが両者の親密化を阻害する一要因となっているという興味深い指摘を行っているが、日本人学生の中での多様性についても目を向けるべきであろう。この問題に関しては別稿で改めて論議したい。

4. 対等な関係の模索

留学生の生活支援活動も軌道に乗り、それをきっかけとした交流が定着する98年度には、留学生会館を中心に英語とスペイン語を主な媒介語とするひとつのコミュニティが誕生した。各国の留学生同士が共同生活を繰り広げる中へ、親しくなった日本人学生たちが頻繁に出入りし、さらなる交流を展開し必要な支援を提供した。留学生にとっては、安定した生活基盤が築かれたと見る事が出来る。ただし、日本社会におけるいわば外国租界のような小コミュニティが留学生にとって真に望ましい生活環境であるとは言えない。留学生がそうした環境の居心地よさに依存し、日本社会に積極的に踏み込む気力を喪失してしまう危険性を早くから察知した日本人学生もいる。

Cは、99年の春休みを利用して1ヶ月余りアメリカ東部へ語学研修に行った。多くの語学研修プログラムがある中で、短期間での研修の効果を少しでも高めるために、日本人だけの団体研修旅行には参加せず、なるべく日本人の集中しないプログラムを探す、という二つの方針に基づいて自分で情報を集め、決断を下し、手続きを行って単身渡米した。ほぼ1年に渡って、日本人学生として、新渡日留学生の生活支援ボランティアを経験し、その他の交流活動にも積極的に取り組んだ後、短期間とは言え、自身が留学生の立場になったわけである。そうした経験を経て帰国後、留学生を見る眼は変わったかと問われて、Cは迷わず、(彼らを)見る眼は変わったと思う、しかもその眼は前より「ちょっとシビアになった」と言っている。

前から思ってたんですけど、ここの留学生はちょっと甘いんじゃないかと思います。すごく私らに頼っていると思います。私は向こうに行って、何もかも調べたりとかやったので。でも、ここの留学生は何でもかんでもやってもらっていると思います。だから自分の日本語を試す、という意味でも、もっと積極的に自分1人でやってみようと思えたらいいのになと思います。

このようなかなり厳しい指摘に関しては、留学生を弁護する発言もある。Aは、

依存心が高まる、といっても、何もかもボランティアの学生に頼るわけじゃないですよ。…郵便局とか買い物に自分で行ったりしたときは自分しかいないわけですから、それはそれで自分で乗り越えることもできるし。…ほんとうに…日本人の助けがいるというときにボランティアに助けを求めるわけで、何もかも依存しているわけじゃない……留学生がアパートを探すときでも、自分で不動産会社に行って、自分で何もかもやるというのは不可能なこと

だし、そういう時にはボランティアに助けを求めるというのは普通だと思うので……。

と述べ、受け止め方の違いを示している。しかし、Cの留学生に対する手厳しい指摘は、留学生と対等でありたいという信念に基づいたものであり、その点に関しては、留学生たちも共感するところであることは間違いない。以下、この「留学生と日本人学生が対等な関係を築く」というテーマがどのように生まれ、それが交流サークルの活動にどのように反映されたかを見る。

98年5月、4月に渡日し日本語集中教育を受け始めた留学生たちから、習ったばかりの日本語を日常生活の中で練習する機会が不足していることへの対処を求められ、交流サークルの学生たちを中心に新たな活動が開始された。週2回、昼休みを利用して、日本人学生との会話の時間をもつことにしたのである。この活動の企画に際し、留学生からの希望で、1回は日本語で、残りの1回は英語で会話を行うことが決定した。これによって、留学生が日本人学生の英会話練習をサポートすることになり、日本人学生の一方的な留学生支援を脱して互恵的なプログラムになることが期待された。さらに、この活動の企画運営に当たる新たな組織が以前からの交流サークルとは別に作られ、日本人学生と留学生が共に対等な立場で参加することが合意された。したがって、ミーティングにおいても、リーダーとなった学生の意識的な努力により、日本語と英語が併用され、双方向のコミュニケーションを重視した活動が始動した。

ただし、この新しい活動組織は、当初、交流サークル外のメンバーも加わり、より開かれた活動を展開することを目指して既存のサークルとは別組織にしたものの、多くのメンバーは重複しており、外部から見ても紛らわしかったため、翌年には交流サークルの1つの活動部門として組織的に合体することになった。この結果、交流サークルの活動全体（伝統的なイベント活動、新渡日留学生の生活支援活動、昼休みの会話）に、新しい理念、すなわち「留学生と日本人学生の対等な関係に基づく活動」が浸透するはずであった。

しかし、99年4月の面接においてCが早くも、日本人学生が新入留学生に配布する日英両語のキャンパス及び周辺部の生活地図の改訂版作りに取り組んでいるのを見ても、留学生は積極的に参加してこないということを指摘するようになった。

マップを作ってるって言っても、手伝おうか、とも言わないし、彼ら（日本人）がやるから、彼らの仕事だから、みたいな感じで何も手伝わないから。自分たちもマップをもらって活用してきて、（今度は）恩返しに次（に来る留学生）を助けてやってもいいんじゃないかなと思うんですよ。

Cは、そもそも現在の交流サークルの前身には、留学生から日本人との交流を希望して始まった活動があったにもかかわらず、日本人のメンバーばかりが役割分担する結果になっ

ていることを指摘し、なぜ留学生がもっと関わらないのか不満を述べる。

動いているメンツをみると日本人ばかり。で、こっちから声をかけないと留学生は動かない、という感じなので、最初と違うなど。最初はこのシステム、どういう風にグループを作ったらいいのかとかアドバイジングの作り方だとか、(サークルの)申請したりだとか、いろいろあるじゃないですか。そういうのはヘルプが必要だと思うんですけど、これだけずーっとやってきたら、もうやり方とかわかると思うので、もうちょっと私たちといっしょにやってもいいんじゃないかなと思います。

一体当初の目標にどのような変化が起こったのだろうか。留学生はサークル活動からいつの間にか身を引いてしまったのだろうか。また、日本人学生たちは、留学生とのコミュニケーションをあきらめてしまったのだろうか。

私たちも、やってあげるのが当たり前みたいになってきているんじゃないかなと思うんですよ。後で考えてみて、私はそう思ったんです。

すなわち、一緒に活動するように声をかけるかどうか以前の問題として、日本人学生と留学生の関係が以前のように助ける側と助けられる側に固定化されてしまっているようだとかは気づく。留学生が積極的に参加してこないということへの憤懣を越えて、日本人学生の側にも問題があることに思い至るのである。

そこなんですよね。どっちも今までの状態に慣れてしまっていて、助けてあげる、助けられるというのが当たり前で。(一緒に活動するということは)話には出るんですけど、実際、その場になるとそういう風になってしまう。

1年間サークルの代表を務め、その後Bにその座を譲ったAも99年の7月の面接で、自分の代に発展的に生まれた新しい目標が定着する前に曖昧になってきたことを悔恨を込めて述懐している。

当初、留学生と一緒にやっていくという目標だったんですけど、それが段々はっきりしなくなって……なかなか出来ていないな、難しくなってきたり最近感じてきたんです……

前年の4月に渡日入学した留学生の生活支援活動をきっかけとして、交流サークル活動を多角化し、以前とは違った、留学生と共に作るサークルへと発展したはずだったが、最初は参加してくれた留学生たちが最近あまり企画運営に加わっていないと言う。留学生たちには、次第に専門の勉強の負担が増しているという事情があるものの、Aは、理由はそれだけではないと見る。

ミーティングも日本語でやった方が早いじゃないですか、どうしても。いろいろ話し合うことが沢山あるときに日本語だけで素早くやってしまうと、留学生にとってはどうしてもついて来なくて、無口になって、ただ座っているだけという風になる……それで段々来てもらえないとか、そういう風になってしまったのかなと今思っています。

やはり言語能力の差は大きな問題であり、そうした言葉の壁を何とか乗り越えられるように

絶えず意識的にケアしていかなないとすぐに日本人学生と留学生との均衡が崩れてしまうということをAは指摘している。当初、留学生も交えて昼休みの討論を企画したときには、留学生の日本語力は初級段階で、日本語での討論への参加が不可能であることは誰の目にも明らかであった。どんなに面倒でも彼らと同じテーブルについた限りは日本語と英語の二カ国語で討論を進めるしかなかった。その時からほぼ一年経って、留学生がある程度日本語を習得し、彼らとの日常会話にも日本語を使う割合が増えた段階では、気の緩みが生じる。簡単なことならば日本語だけでも構わないと考えて、あえて通訳したり留学生の理解を確認することを省略するようになる。ただし、留学生がどこまで日本語だけでついでこれるか、討論がどの程度込み入ってきたら通訳が必要かの的確な判断と切り替えは容易ではない。留学生自身が待ったをかけない限り、日本語だけで討論が終始してしまい、気がつくまで留学生が取り残されたまま時間切れとなることも珍しくはない。日本人側には、留学生の日本語力を「見くびる」ことへの遠慮と、もう一年も経ったのだからある程度は理解出来るだろうという期待と、例え全部分からなくても出来る限り日本語でコミュニケーションを取ることが日本語上達への道だから当然といった見方が混在し、留学生側には、自身の日本語力への自負心、語学力不足を自己責任に帰す態度、討論の途中で通訳を求めて日本人学生へ負担をかけることへの遠慮やためらいがあり、それらの相乗効果で事態は歯止めのかかることなく進んで行ってしまう。

第二に、留学生を、役割を分担する一員としてもなかなか取り込めていないという点をAは指摘する。行事に際し、ポスターを書いて掲示する、部屋を予約する、鍵や備品を事務室で借り出す、必要な物資の買い出しといった事柄に関しても、留学生に任せられないわけではないが、日本人がやってしまった方が早い、問題が少ないという効率的な観点からついそうしてしまう。

大学祭とかにしても、どうしても主な企画は日本人がしてそれに留学生が参加するという形になりがちで、一緒に力を合わせてやっていくという風にはなかなかならないんですよ。この前も、奈良に旅行に行ったんですが、あれもほんとに日本人が企画して日本人の言うがままに（留学生を）連れていった、という感じで、なかなか（留学生の）意見が反映されていない、というのを感じましたね。

これらの問題を日本人学生と留学生が意識的に取り上げ対策を講じるというところには未だ至っていない。Aは、メンバーの多くが少なくともうすうすは問題を感じながらも、日本人同士で進めていく方が楽なため妥協してしまっている、と見る。

援助をする側とされる側の関係が一方向的に固定されることは両者間の関係の発展にとって好ましいことではない。（横田 1999:13-14）友人関係の進展の阻害要因となるこの間

題を誰に指摘されることもなく自分たちで的確に把握し行動に移そうとした留学生及び日本人学生たちであったが、その実現は容易ではない。

「留学生と日本人学生の対等な関係」への模索は以後も続く。99年12月の留学生日本語スピーチ大会の企画運営においてもこの関係が十分に達成されていないことによりいくつかの困難な問題が生じた。そうしたプロセスを通じて、「対等な関係」の必要性が改めて意識され、大会後の反省会で討議されるに至った。Aが指摘した、「メンバーの多くがうすうすは承知しながらも妥協している」段階からの一歩前進ではある。改めて、この問題点を留学生と日本人学生と筆者が共有しながら、そうした関係を築くためにはどのような行動の積み上げが必要なのかをひとつひとつ学び実践していくことが次の課題である。

スピーチ大会の企画運営における問題点の分析と今後の交流活動の展望については、「留学生と日本人学生との交流：対等な関係の模索（その2）」（花見 2000）を参照されたい。

文献リスト

西田 司 1994『異文化と人間行動の分析』多賀出版

花見楨子 1999「国際交流に携わる大学生の質的研究に向けて」『三重大学留学生センター紀要』第1号

_____ 2000「留学生と日本人学生との交流：対等な関係の模索（その2）」『留学生と日本人学生の交流活動推進のための研究』平成11年度三重大学教育研究内容等改善経費による研究プロジェクト報告書（研究代表者：花見楨子）

横田雅弘 1991「留学生と日本人学生の親密化に関する研究」『異文化間教育5』

_____ 1999「留学生支援システムの最前線」『異文化間教育13』